



豊の国情報ライブラリー (1995)



水戸芸術館 (1990)

キーワードからたどる 「磯崎新」

大分市美術館館長 菅 章

2010年に大分市美術館館長就任。「ネオ・ダダJAPAN1958-1998-磯崎新とホワイトハウスの面々(1998)」、「磯崎新 美術館と住宅(2004)」などの展覧会を開催。



磯崎さんの先進性と多面性

言いたいことが単純明快なら、受け取る側も受け取りやすいのですが、磯崎新さんは、そんな風に分かりやすい人ではありません。時代と同じ歩みではなく、何歩か先を進んでいるので、ようやく時代が追いついた頃にはさらに先に進んで異なる方向を見ている。一般的な感覚ではとてもついていけない。

もうひとつ、捉えどころのなさにつながる要素は、とてもマルチな才能を持っているということ。建築だけではなく、芸術、演劇、文学、哲学、思想、デザインなど、多岐にわたる分野に精通し、コラボレーションしています。各分野で先鋭的に活躍している人からの評価が高いというのがその証拠です。最先端を走り、さまざまな分野を横断している磯崎さんの先進性と多面性こそ、彼自身、そして彼の作品が「先鋭的で素晴らしい」か「分かりづらくて難しい」と評価が真っ二つに分かれる、大きな理由だと言えるでしょう。

この先進性と多面性において、ずば抜けたレベルにあるため、私たちが三浦梅園のことを理解できないように、磯崎さんのことを捉えどころがないと思ってしまうのかもしれないね。

過激なほどにおもしろい！
前衛的な青春

磯崎さんを語る上で必ず登場するのは、「ネオ・ダダ」という1960年頃の前衛芸術運動です。キムラヤ画材店の倉庫アトリエに集っていた吉村益信、風倉匠、赤瀬川原平といった仲間が東京に進出。そこで「反芸術」を掲げて街頭で過激なパフォーマンスを繰り広げる「ネオ・ダダ」の活動を展開しました。さらにこの頃は、学生や労働者、市民などによる大規模デモに知識人も加わる「無軌道で、過激な」政治の季節でもありました。1960年代、熱く、前衛的であった青春時代、芸術や建築、哲学、政治などあらゆるジャンルとの出会いが、多面的に動く「磯崎新」の基礎を作ったのかもしれない。

そして、同年代に処女作となる大分県医師会館、出世作となる大分県立大分図書館、岩田学園新校舎、個人宅N邸と、郷土の大分市内に次々と磯崎建築が誕生。そのいくつかは残念ながら現在は解体されていますが、今なお、豊の国情報ライブラリーやJR由布院駅、ビーコンプラザなど、県内各所に磯崎建築が現役としてあります。初期の前衛性と比較しながら見るのも面白いと思います。

美術的建築家への道

本当は画家かエンジニアになりたかったという磯崎さん。高校時代は大分市のキムラヤ画材店の倉庫アトリエに通ってはデッサンに勤しんでいましたが、勉強が出来過ぎたという理由で進路は東大へ。芸術に少しでも近い場所に身を置くために工学部に進学し、建築の世界へ足を踏み入れました。

建築というと、いわゆるゼネコンによる工事のイメージが強い。基礎を造り、構造計算し、建物を造る。しかし、磯崎さんの場合はデザインにも芸術的、思想的なものが織り込まれるため、なんだこれは！ というような建築になったわけです。大分県立大分図書館(現アートプラザ)はまさにそう。皆さんの記憶にも残っているとは思いますが、度肝を抜くような図書館で、迷路のような館内は純色の鮮やかな廊下があったり、なぜこんなところ？ というような場所に階段があったりと、効率性、経済性、機能性とは異なったものでしたね。芸術的な思考が強い建築家は、大学の研究室で磯崎さんが師事した丹下健三や、近代建築の三大巨匠の一人であるフランスのル・コルビュジエなどが代表格ですが、いずれにしても少数派です。磯崎さんほどの芸術的な建築家は同時代でも珍しいですね。

コンセプトは巧みでない。
アンビルトのこだわり

1990年代に入ると、アンビルト(建設がされない)の建築が磯崎さんにとって特別な意味合いを持ちます。通常なら、コンペに応募して採用されなければ「負け」で、採用されても建てられなければ、やはり「負け」です。しかし、磯崎さんはまったくそう思いません。「いいプランができた」「いずれ役に立つときがくるだろう」というスタンスで、主催者の意図を超えた実現不可能なプランを作っては積極的にコンペに提出するのです。なぜ、そのような「負け試合」に挑むのか、普通は理解に苦しみます。「磯崎新は謎に満ちた人」という多くの人が抱いているイメージにもつながりますが、そこには明確な理由があるのです。

実際に建築された建物は、いずれ壊れます。30年も経てば耐震補強が必要になったり、耐震の基準そのものが変わるなど、建てた当初の姿には確実に寿命があります。建物よりも寿命が長いのは図面や模型。建物よりも建築模型の寿命の方が長いのです。そして、究極を言えば優れた「コンセプト」には寿命はない、ということ。それが磯崎さんにとってのアンビルトの本質なのです。



サン・ジョルディ・スポーツ・パルス (1990) 奈義町現代美術館 (1994)



ロサンゼルス現代美術館 (1986)



北九州市立美術館 (1974)



群馬県立近代美術館 (1974)



大分県立大分図書館(現アートプラザ) (1966)